

「小石川後樂園研修」

第一支部運営委員会

2020年1月28日（火）

去る1月28日（火）13:00-16:00、小石川後樂園において庭園研修が行われました。降雨の中、遠く広島からの参加者もいらっしゃいました。会員30名、委員2名の計32名が参加しました。

研修の前半は小石川後樂園サービスセンター長の西山礼美様を講師に座学を、後半は園内を案内していただき、ガイディング上のポイント等の説明を受けました。

座学では、始めに後樂園は1629年に徳川家康の11男の頼房が將軍秀忠より下賜された現在の土地に水戸藩中屋敷（のちに上屋敷となる）として建立したのが最初であり、頼房の継嗣である光圀が完成させた庭園である、との説明がありました。現在、特別史跡・特別名勝に指定されています。造園のコンセプトは海・川・山・海4つの景と内庭だったそうです。庭園の中心にある大泉水は「海」（琵琶湖）を表し、大堰川と渡月橋は「川」を表し、通天橋は（岩場の上の方にある）「山」を表し、稲田は文字通り「田園」を表しました。内庭（うちにわ）は上屋敷の書院の庭として造られたそうです。



後半は園内巡りをしました。園内を散策していくと光圀の人となりを表す事物に出会います。「得仁堂」は光圀が「伯夷・叔齊」という中国古代の人物に感銘をうけたことからその木像を安置したお堂です。稲田は嗣子の綱条（つなえだ）の奥方が公家出身のため

農業や米づくりの大変さを教えるために作ったそうです。また、光圀は中国の明からの亡命者である朱舜水を招き、その意見を取り入れました。園内には朱舜水の意見を参考に作ったと言われるものがいくつかあります。「唐門」（からもん）は、屋敷と後樂園を隔てる“結界”の役割を果たし大変重要でしたが、戦争中に焼失し現在再建中でした。「後樂園」の名前も范仲淹（はんちゅうえん）の『岳陽樓記』



の一説「先天下之憂而憂、後天下之樂而樂」から朱舜水が選んだものだそうです。かつては唐門を通過して庭園に入るのが本来のルートであり江戸から木曾路を通り、琵琶湖（大泉水）を眺め、嵐山の渡月橋を通り、京都に至る景色（縮景）を楽しむように設計されていたとのこと。参加者からはガイドをする際、園内のここではこの説明をし、あのポイントでは光圀の逸話を入れてガイドをしよう、との声が聞かれました。